

1914年日本の軽業師たち —ヨーロッパで活躍していた日本人軽業師・曲芸師たち群像— 講演者：大島幹雄（サーカス学会会長）

大島と申します。私はサーカスの仕事を40年ぐらい続けた関係で、サーカスのことを長年調べてきました。去年6月にサーカス学会というのを立ち上げて、本格的にサーカスのことを調べていこうと思っています。

サーカスのことを多方面に調べているなかでも一番関心があるのは、今日の映像にもあった、海外で仕事をしている日本人のサーカス芸人たちです。私自身は、海を渡ったサーカス芸人という呼び名でこの人たちのことを呼んでいるんですけども、このテーマに関して約30年間調べてきました。今まで2冊、『海を渡ったサーカス芸人』（1993年、平凡社）と『明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか』（2013年、祥伝社）という本を出していますが、大変たくさんの方の芸人さんたちが海外で活躍していたことが分かるんです。おそらく1,000人は下らないと思います。ただ、本当に、彼らはまったくと言っていいほど痕跡を残してくれていないんですね。たまたま1冊目の『海を渡ったサーカス芸人』は、沢田豊という人のお子さんがいらっしゃって、彼がブラジルを旅行しているときに、サンパウロで発行されていた邦字新聞に対して自分の半生を語る記録が残っていましたので、彼の伝記を書くことができたんです。『明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか』にいたっては、ロシアに渡ったサーカス芸人たちの中で、革命後のソ連にも残った人たちの足跡を辿ったわけですが、とにかく全くと言っていいほど痕跡は残ってなくて、回想録もない。新聞記事とか外交史料館に残っているパスポートの申請記録とか、ロシアに残っているポスターや資料を本当にかき集めて、まさに、点を線にするということしかできないわけです。彼らの実態はなかなか分からないというのが現状なんです。

ただし、歴史の狭間から、ぼっかり、彼らの顔が見えてくる時代があるんですね。それが1914年なんです。今ご覧になった『日本の軽業

師』が作られたのも1914年ですね。この1914年になぜか、海外へ渡った日本のサーカス芸人がぼっかり、顔を現わしてくるんです。なぜかという、第一次世界大戦ですね。つまり、この年、第一次世界大戦が勃発して、ヨーロッパが戦場になったわけですから、ここで、海外に飛び散っていた日本人たち、芸人たちがどうなったのかということで、結構資料が出てきたんです。

そのうちのひとつとして、日本と交戦関係にあったドイツでたまたま仕事をしているサーカス芸人たちが、拘留されてしまっているんです。そのことを明らかにしたのが、2013年に出た『「八月の砲声」を聞いた日本人 — 第一次世界大戦と植村尚清「ドイツ幽閉記」』（奈良岡聡智、2013年、千倉書房）です。これは植村さんという方が医者だったんですけども、勉強をするためにスイスに行く途中にドイツに立ち寄った時に捕まってしまったということで、その拘留所で二人のサーカス芸人と出会ったということを「ドイツ幽閉日記」で書いています。二人は野田という人と松井という人です。この記録を発掘した奈良岡さんは、巻末に、この時代に拘留された日本人のリストを挙げているんですけども、その中に27名のサーカス芸人の名前が載っているんですね。『海を渡ったサーカス芸人』の主人公となった沢田豊もこの時拘留されています。今まで名前を明らかにされていなかったのが、ここに来てはじめて名前が出てきて、顔を現わしてきたということです。

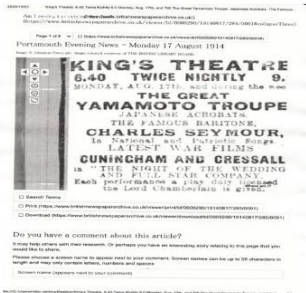
もうひとつ、非常に貴重な資料ですけども、1914年の『大阪時事新報』に大阪の興行師の奥田辨次郎の話が載っているんです。奥田辨次郎という人は、今の大阪の千日前を、昔刑場であったのを二束三文で買って、そこを一大歓楽地にする基礎を作った人です。彼は千日前に劇場や公演する施設をたくさん作らせて、オーナーになると同時に、明治時代に海外からサーカス団を招へいしているんですね。有名なのがイタリアのチャリネ (Chiarini) とかイギリスのアームストン (Harmston) とかロシアのバロフスキ (Barovsky) とか、そういうサーカス団を次々呼んだ人なんです。つまり、彼は興行師で

あると同時に、海外にもパイプを持っていたので、海外の日本の芸人たちの消息を掌握していたことがあります。そういうなかで、欧州へは400、500人、米国には300、400人も居るだろうと言っています。さっき言ったように、彼は興行師で、しかも日本から海外に出している本人ですから、この話は非常にリアリティがあるんじゃないかと思えます。ここでまた彼らの顔がぼっかり見えてきたんです。この一週間後に彼は、具体的に欧州に渡っている一座の名前を挙げています。合計18組、87名欧州にいると証言しています。そうすると、先ほどの映像は1914年に作られたものですから、この中に、今日見たフィルムの人たちがいるのではないかと、十分推測できると思えます。

ただし奥田さんが言っているのはあくまでヨーロッパの話で、映像はイギリスで撮られているわけですから、リストの中で誰がイギリスに行っているのかということ調べてみまし

た。大変ありがたいことに、The British Newspaper archive というデータベースがイギリスにあって、ずいぶん昔から現在に至るまで、スコットランドやアイルランドの新聞記事も含めて検索できるんですね。検索ワードをいれると、バーッと出してくれて、大変重宝しているんです。そのなかで1914年、「Japanese acrobat」と「Japanese troupe」という言葉で検索すると、69件と74件ひっかかってきます（図1）。ほとんどの記事が広告で、実際、どういう演技をしたかという情報はほとんどないんですが、データベースを使うと、9組に絞られてくるんです。奥田が挙げた一座の中の9組と、奥田の挙げていない fuji, mizuno, ni-ko という3つがひっかかってきたんです。イギリスで活動した一座ということで、ぐっと絞られてきたわけです。

それではこの人たちはどういう人たちかをみていきます。

<p>英国で仕事をしていた軽業師たち The British newspaper archive Japanese acrobat & Japanese troupe</p>	<p>Japanese acrobat 69 Japanese troupe 74</p>		<p>英国で公演していた軽業一座 (奥田がとりあげていた一座)</p> <table border="0"> <tr><td>横田組 (12名)</td><td>3月に公演</td></tr> <tr><td>濱村組 (7名)</td><td>3月・4月に公演</td></tr> <tr><td>山形組 (5名)</td><td>5月-12月</td></tr> <tr><td>二見組 (7名)</td><td>10月</td></tr> <tr><td>安藤組 (4名)</td><td>3月</td></tr> <tr><td>岡部組 (6名)</td><td>6月・7月</td></tr> <tr><td>両国組 (7名)</td><td>10月</td></tr> <tr><td>山本小芳組 (22名)</td><td>8月</td></tr> <tr><td>福島組 (4名)</td><td>12月</td></tr> <tr><td>(奥田がとりあげていない一座)</td><td></td></tr> <tr><td>FUJI</td><td></td></tr> <tr><td>MIZUNO (7人組の若者と少年)</td><td></td></tr> <tr><td>NI-KO</td><td></td></tr> </table>	横田組 (12名)	3月に公演	濱村組 (7名)	3月・4月に公演	山形組 (5名)	5月-12月	二見組 (7名)	10月	安藤組 (4名)	3月	岡部組 (6名)	6月・7月	両国組 (7名)	10月	山本小芳組 (22名)	8月	福島組 (4名)	12月	(奥田がとりあげていない一座)		FUJI		MIZUNO (7人組の若者と少年)		NI-KO	
横田組 (12名)	3月に公演																												
濱村組 (7名)	3月・4月に公演																												
山形組 (5名)	5月-12月																												
二見組 (7名)	10月																												
安藤組 (4名)	3月																												
岡部組 (6名)	6月・7月																												
両国組 (7名)	10月																												
山本小芳組 (22名)	8月																												
福島組 (4名)	12月																												
(奥田がとりあげていない一座)																													
FUJI																													
MIZUNO (7人組の若者と少年)																													
NI-KO																													

【図1】英国で仕事をしていた軽業師たち The British Newspaper Archive の検索結果より



【図2】横田組 ヨーロッパ巡業中の1914年頃 前列右端が沢田豊 2点とも大島幹雄所蔵



横田組（図2）ですね。横田組は私の本の表紙にもなっているくらい、沢田豊も一座に参加



The Original
◁ Yamamoto & Miss Koyoshi-Troupe ▷
Celebrated Japanese Equilibrists and Entertainers.

One of the most marvellous Acts ever seen, and unique in their kind. Gorgeous Japanese full-stage Settings and Costumes, all of silk, and richly hand-embroidered with gold, never equalled on any stage.
Mr. YAMAMOTO possesses 6 GOLD MEDALS and MISS KOYOSHI 7 GOLD MEDALS, as the recognition of their marvellous acts.

【図3】山本小芳一座 Bernardi, Joanne. Re-Envisioning Japan: Japan as Destination in 20th Century Visual and Material Culture. Rochester, NY: University of Rochester Digital Scholarship Lab, River Campus Libraries. <https://rej.lib.rochester.edu/viewer/5021> [Accessed March 27, 2021.]

していた有名なグループです。ポスターはグループです。ロシアでやった時のものです。

それから山本小芳一座。これは大所帯で22名です。こういうポストカード（図3）も残っています。

あとは安藤組（図4）、6名です。これはロシアでやったときのポスターです。あと、福島組ですね。

岡部というグループは、南米で公演した時の新聞記事に顔が出ています。欧州に行った時と同じメンバーかどうかはわかりませんが、非常に参考になります。

あと、濱村組（図5）です。この濱村というのは、京都に「ハナムラ」という有名な中華料理屋さんがあるんですけども、そこを開いた濱村保三の父親で濱村保門という人が座長になっている一座です。



【図5】濱村組 個人蔵

ОРГАНЪ
ОРГАНЪ
ОРГАНЪ

Редация и Выход:
Орханское 13. Тел. № 10-93.
Редакция и Административ:
Орханское № 13. Телефон 10-93.

Редактор-издатель: П. Э. Белово
Редактор-выпускающий: К. Е. Витоло
Адрес для телеграмм: Варшава Варшава
Адрес для почты: Варшава Варшава

Контракт открыт с 12-4 ч. дня
Контракт открыт с 12-4 ч. дня

The Great ANDOS
Японская группа. 3 ДАМЫ 3 — 5 МУЖЧИНЫ 5 Японische Gruppe.
Eigene Fracht-Decorations.
Brevetee Costume
Mlle OTTANA
In ihrem staunenswerten Leistung mit gespanntesten Drahtseilen

В настоящее время я боюсь в продолжении двух пьес 3-ий раз
„АКВАРИУМЪ“ в Петербургъ,
с 4-го марта до 27-го апреля.
Афиша открыта на весь сезон в России на 1912 годъ открывается съ 1-го мая.

【図4】安藤組 大島幹雄所蔵



【図6】山形組 個人蔵

データベースで一番引っかかってきたのが、山形組（図6）です。ヒットした50件以上が山形組で、大半が広告です。非常に長い期間、5月から12月までイギリスだけじゃなくてス

コットランドでも公演していることが分かりました。しかも5人なんです。さっきのフィルムも5人なんです。5人で、しかも長い間滞在していたということで、可能性としてはかなり高いんじゃないかという気がします。しかも芸の紹介が書いてありまして、宙返りとバランスと足芸、これはリズリーという人が始めたリズリー・アクトという、人間を足でけり上げる技なんですけれども、これをやっていた。さっき見たように、バック転とか子供がバランスをとるやつもありましたので、かなり近いんじゃないかと思います。画像はないのかと、サーカス学会の森下洋平さんという若手で非常に優秀な研究者に探してもらったところ、写真を見つけてくれたんですね。5人で、大人が二人、子供が二人、ちょっと子供なのかよくわからない人が一人いますけれども、非常に構成としては近いんです。けれども、さっきの写真の人たちとは顔がちょっと違うんじゃないかという気がするんですね。

そこで、人数は違うんですが、私がこのグループじゃないかと思っているのが、両国組（図7）という7人組です。さっき濱村組の話をしましたけれども、濱村は両国組のオーナーでもあったんですね。両国組の座長だった菊田という人が、濱村の右腕だった人なんです。彼がやっていた芸というのは、フィルムが一番最後に出ていた太神楽なんですね。撥を使ったり、鞠を使ったり。ドイツの『東亞』という雑誌に出てくる両国組の広告に、樽の中に子供を入れて足で回す芸をすると書いています。そうすると、かなりまた近くなってきた。バランスをとる芸もやっているんです。そうすると、樽の中で子供を回す芸と、バランス技をやっていたということは、かなり近いんじゃないかと思うんですね。菊田の写真が欧州・地中海文明博物館（Museum）にありまして、それを見ると、映像と同じようにちょび髭だし、ちょっと似ているかなという感じでしたが、いま大型画面で映像を見て、多分同じ人だろうと半ば確信をいただくようになりました。

裏付けはこれからたくさんしていかななくち

やいけないと思うんですけども、折角こういう貴重な映像資料がぽっかり浮き上がってでてきたので、これを後世に残すときに名無しの権兵衛さんでは可哀想なので、なんとかしてこの一座（図8）を特定して、残していきたいなど。そのためには、私自身、様々な協力を得ながら引き続き調査を続けていきたいと思えます。いずれその結果をまたご報告させていただきます。ご清聴ありがとうございました。



【図7】両国組 個人蔵



【図8】『日本の軽業師』Courtesy of BFI National Archive